

「男性名詞複数生格におけるゆれ」に関する一考察

サンクトペテルブルク大学文系学生を対象としたことばの意識調査から¹

中 田 敦 子

1. 研究目的

一般に硬語幹男性名詞は複数生格形において ов 語尾をとるが、例えば граммов/грамм に代表されるように、ов 語尾とゼロ語尾の両方の形を有する、言わばゆれのあるケースが存在することはアカデミー文法における記載をはじめ広く知られていることである (АГ' 60 151-153; АГ' 80 499-500 他多数)。

主に 60 年代 Граудина Л. К. を中心に調査されてきたこの男性名詞複数生格におけるゆれの問題について先行研究は、「大多数の硬語幹男性名詞が ов 語尾をとるという言語内的原因」及び「標準語におけるノルマを安定させようとする社会的原因」の 2 つの作用によって、ゼロ語尾使用の増加傾向が「全体として非常にゆっくりしている」(РЯСО 66) こと、また「ов 語尾が主に年齢層の高い者に多く使われ」ており、社会的階層の点から「作家・言語・文学研究者に ов 語尾の使用が、労働者・勤め人・学生にゼロ語尾の使用が目立つこと」から、同傾向は「ゆっくりながらも着実に行われている」(РЯСО 82-83) こと等を指摘している。

本稿では、この語幹を硬軟のペアを有する硬子音で終える男性名詞の一部に観察される複数生格形における語尾のゆれについて、その使用の現状の一端をアンケート調査による結果をもとに報告するとともに、そのゆれの持つ意味合いについて考察を加える。

2. 研究の背景

現代ロシア語において、この種のゆれを持つ語は一定の語彙範疇内に収まることが報告されている。(АГ' 80 499-500; РЯСО 70 等) しかしこの男性名詞複数生格におけるゆれの問題は、語形変化の体系におけるゆれの意味合いという点において、他のそれとは一線を画すものとして位置付けられるなど、言語学的に興味深いゆれとされる。例えば中性名詞単数主格 копье に関し複数生格に копьев, копий, 女性名詞単数主格 межа に関し複数生格に межей, меж とが存在する場合、複数生格形はそれぞれその語尾によって弁

別されているが、単数主格 нацмен における複数生格 нацменов, нацмен のゆれでは、ゼロ語尾をとる後者の語形が、単数主格の語形と格間における同音異義語 (омоним) をなしている点において他と様相を異にする (РЯСО 67-68)。つまり「単数主格がゼロ語尾をとる場合、複数生格形ではゼロ語尾はとらないとする法則性からもはずれる」(АГ' 80 499) と同時にロシア語における аналитизм の問題を考える上でも重要なヒントを有しているといえる。こうした特異性が、この「およそ 200 語」² ともいわれる、限られた単語群を研究の対象たらしめる要因となっている。

3. 研究方法と分析方針

現代ロシア語において、単数主格形と複数生格形の両形でゼロ語尾をとるものには、次の単語群がある。

- (1) 果物・野菜の名前
- (2) 軍関連に属する人を表す名詞
- (3) ペアを成す物
- (4) ある民族に属する人を表す名詞
- (5) 測量の単位

本報告では、(1)～(3)の果物・野菜の名前、軍関連に属する人を表す名詞、ペアを成し用いられるものを表す名詞群について考える。³

調査対象語彙には、Граудина 他 (1976) に挙げられている語群一覧 (同 127-128) から、特に現時点においても依然興味深く推移を続けているとみられる語をまず選択し、次にそれを、ゼロ語尾が多く観察されるとされる「会話体」を意識した質問形式に埋め込んだ。⁴

質問表は以下の形式でインフォーマントに提示し、カッコ内に示した (французы род. мн.) の指定にそって会話を成立させるように求めた。

(例) А: Спроси у этих _____, когда будет вечер их землячества. (французы род. мн.)

Б: Спроси сам.

書き込み式のアンケート故に強められてしまう推敲意識等を極力排除するように、インフォーマントには「あなたならどう話すか」書いてくれるように指示した。⁵ しかし書き込み式アンケートである以上、ここ

から得られる結果は「(会話体における) ов 語尾・ゼロ語尾選択に関する意識調査」と位置付けるのが妥当であろう。

今回は、言語に対して自由な姿勢をもつ若者であると同時に、母語に関して一定の教育を有し比較的言語感覚が鋭いと期待されるサンクトペテルブルク大学文学部の学生（一部東洋学科の学生を含む）を調査対象としている。144 名から有効な回答を得た。⁶

アンケート結果は以下の 3 点に注目し、分析を行っている。

- (1) ゆれの状態及び「ゆりかえし」の有無
- (2) 名詞の意味合いにおいて個々が表される場合 (расчлененное значение) と集合的意味を表す場合 (нерасчлененное значение) と語尾選択との問題
- (3) ペアで主に用いられるものを表す名詞における、単数主格形の認識 (名詞の性に関する認識) と、複数生格語尾選択との関連

(1)に関しては、対象全ての単語についてそのゆれの実情を観察する。なお ов 語尾を一般にとるとされる名詞がゼロ語尾を許容し始めたというゆれの成り立ちから鑑み、ゼロ語尾をとると先行研究にて報告されてきた単語に関し今回の調査で ов 語尾形が多くの人に選択されているという場合には、この現象を「ゆりかえし」と名づけることとし、その実態を報告する。

(2)に関しては、軍関連に属する人を表す名詞グループを対象とし、Ожегов・Шведова 詳解辞典における гардемарин の項にみられるような「名詞の意味合いと語尾選択の関係」についてその実態を調査する。

(3)に関しては、対象はペアで主に用いられるものを表す名詞とし、男性名詞か女性名詞かといった単数主格形の認識は、複数生格語尾を選択する際になんらかの影響を及ぼすのか否かが明らかにする。⁷

4. 結果・考察

4. 1. 果物・野菜の名前

〈ゆれの状態及び「ゆりかえし」の有無〉

果物・野菜を表す名詞群からは、次の 12 の単語⁸ абрикос, ананас, апельсин, баклажан, банан, гранат, грейпфрут, каперс, лимон, мандарин, патиссон, помидор を対象とした。

コンテキストは、
мать: Какой из этих _____ ты хочешь взять?
сын: Этот.

РЯСО に、1962 年から 63 年にかけて実施された店内での録音調査の記録がある (同 82)。それによれば、
абрикосов - абрикос (5-45) 比にして⁹ (10-90)
апельсинов - апельсин (0-100) 比にして (0-100)
бананов - банан (39-11) 比にして (78-22)
баклажанов - баклажан (0-100) 比にして (0-100)
гранатов - гранат (2-48) 比にして (4-96)
мандаринов - мандарин (3-47) 比にして (6-94)
помидоров - помидор (6-394) 比にして (1.5-98.5)
とあり、これらの結果から、話し言葉ではゼロ語尾形が圧倒的に使用されていると結論づけている。

以下に今回の調査結果を百分率で示すが、無回答等により和が 100 になっていないところがある。¹⁰

абрикосов - абрикос (88-10)
апельсинов - апельсин (90-10)
бананов - банан (97-2)
баклажанов - баклажан (76-23)
гранатов - гранат (81-18)
мандаринов - мандарин (75-24)
помидоров - помидор (67-33)
ананасов - ананас (98-0)
грейпфрутов - грейпфрут (94-3)
лимонов - лимон (98-1)
патиссонов - патиссон (94-6)

全体的な ов 対ゼロの比は 87-12 と ов 語尾優勢の結果が得られた。また先行研究 (РЯСО 82) に指摘があるように、баклажан, помидор, мандарин でゼロ語尾が健闘するなど、単語間におけるゆれの差はここからも読みとれる。

これら 3 つの単語に апельсин を加え、1963 年の科学アカデミーによる同じく書き込み式で行われたアンケート調査の結果と照らし合わせたものが以下の表である。(РЯСО 82-83 参考：パーセント表示は筆者による)

	1963 年の調査						今回の調査	
	1929 年迄		1930 年代		1940 年代		約 1975-84	
複数生格語尾	ов	ゼロ	ов	ゼロ	ов	ゼロ	ов	ゼロ
апельсин	71	29	57	43	61	39	90	10
баклажан	37	63	36	64	37	63	76	23
мандарин	59	41	42	58	46	54	75	24
помидор	50	50	38	62	37	63	67	33

単語 апельсин は、先行研究の結果から「ов 語尾の選択率が他の 3 つの単語に比べ常にやや高い」ことが読み取れるが、今回の結果ではそれが更に圧倒的な

数値の差として表れた。また先行研究において、ゼロ語尾の選択率がどの世代でも6割と高かった баклажан, 若い世代がよりゼロ語尾を選択しつつある様子がうかがえた помидор と мандарин で、逆に今回の結果では ов 語尾が優勢を占めた点が特筆される。

科学アカデミーの行ったアンケートが同様に書き込み式で行われていること、またアンケート項目の立て方に関しても差が見られないことから、今回の ов 語尾優勢の結果を直ちに「その方法論ゆえ」と断定づけることはできない。¹¹ 従って今回得られた ов 語尾断然優勢という結果自体は、「ゼロ語尾が着実に定着しつつある」としてきた先行研究に対し再考を迫るものと考えられる。

4. 2. 軍関連に属する人を表す名詞

〈ゆれの状態及び「ゆりかえし」の有無〉

ここでは単語 гардемарин, гренадер, гусар, драгун, канонир, кирасир, партизан¹²を対象としている。使用したコンテキストは、

(1) Наконец, они увидели двух _____.

ов 語尾対ゼロ語尾の結果を百分率で一覧すると、
гардемаринов – гардемарин (81-19)

гренадеров – гренадер (95-5)

гусаров – гусар (55-45)

драгунов – драгун (64-36)

канониров – канонир (93-7)

кирасиров – кирасир (78-22)

партизанов – партизан (26-74)¹³

гардемарин, гренадер, гусар, драгун, кирасир, 以上5つの単語に関し、ов 語尾を選択した人は75%, 一方ゼロ語尾を選択した人は残りの25%であった。

辞典3種のどれにも特に「ゆれ」に関する注のなかった単語 канонир に関しては、アンケート調査の結果でも9割の人が ов 語尾を用いておりその傾向を裏付ける結果となった。こうした圧倒的な ов 語尾使用の傾向は、今回単語 гренадер にも見られた。ここで興味深いのは単語 гренадер の ов 語尾形を АГ* 60 が「устарелое」としている点である(同152)。その当時「устарелое」とされている гренадеров の形が、今日これだけ多く選択されるというのは、やはり「男性名詞複数生格形の大多数を占める ов 語尾形をとどめよう、残そう」とする言語内的要因による、いうなれば「ゆりかえし」とも受け止められる。

同様に АГ* 60 (152) で「устарелое」と指摘されている гусаров, драгунов の形も、大差とはいえないまでもゼロ語尾形 гусар, драгун を凌いでいる点、更

に MAC において「ゼロ語尾が普通で、ов 語尾形はより稀」とされる単語 кирасир においても ов 対ゼロ語尾の比が78対22と ов 語尾が勝ることを考えあわせると、「ゆりかえし」と捉えることがより自然な解釈のようにも思われる。あるいはこれらに共通する「passive な語彙」という性質が、規範的な語尾を要求しているとも考えられる。

〈個々が表される場合(расчлененное значение)と集合的意味を表す場合(нерасчлененное значение)と語尾の選択〉

Ожегов・Шведова 詳解辞典 гардемарин の項をひくと、「集合的な意味合いのときはゼロ語尾 гардемарин を、個々の人物について述べている場合には ов 語尾形 гардемаринов」をとあり、他に гренадер, гусар, драгун, кирасир にも同様の記述がある。¹⁴

(1) Наконец, они увидели двух _____.

(2) В те времена еще не было _____.

コンテキスト(1)のように個々に注目している場合の ов 語尾・ゼロ語尾の比は75対25、コンテキスト(2)のように集合的な意味合いで用いる場合でのそれは63対37という結果であった。数の上から見て、こうした意味合いの差異によって語尾の選択を変化させているのは11%の15名という結果であり、歴然とした差としては現れなかった。

更にこの点につき、個人内での語尾選択の傾向を調べたところ「расч.にて ов 語尾が多く、нерасч.でゼロ語尾が多く使われる」とされる記述の傾向に沿った回答は全体の46%、「変化なし・逆の傾向」を示すものが合わせて54%となった。ただしこの「傾向あり」とする回答においても、「расч.を意味するコンテキストでは ов 語尾のみ、нерасч.を意味するコンテキストではゼロ語尾のみ」とするような絶対的な回答が見られないことから、「расч. と нерасч. といった意味の差が語尾の選択に強く関与している」とするこれまでの記述を支持しえない結果となった。¹⁵

しかしまたこれら限られた資料をもって「расч., нерасч. と語尾選択の間に関連はない」と結論づけることも早計である。今回学生以外に行った数人の教官へのアンケートにおいて、「軍関連に属する人を表す名詞」に関し расч. と нерасч. 間で ов 語尾とゼロ語尾を使い分ける回答があった点、更には果物・野菜を表す名詞においてもこうした傾向を示す回答があったことなどを考え合わせると、「こうした差を言語にするべく反映させようとする人もある、しかし大半の場合

では、この差は無関心に見逃されてしまう」といえるのかもしれない。今後この点に関し精査していく必要がある。

4. 3. ペアを成す物

〈ゆれの状態及び「ゆりかえし」の有無〉

使用した単語は бахилы, ботфорты, боты, бутсы, гольфы, джинсы, кеды, краги, латы, мокасины, носки, пимы, погоны, пьексы, рейтузы, сандалеты, чулки, шаровары, шорты, штиблеты, эполеты, лампасы, манжеты。¹⁶ コンテキストは、それぞれの名詞が登場する上で、違和感のないものとなるように以下の4つを用意した。

- (1) Валя: Ой, давно не видела таких хороших _____. Где ты их купила?
Саша: На ярмарке.
- (2) сын: Я никогда не видел таких _____.
отец: Я тоже не видел.
- (3) Саша: У тебя никогда не было _____?
Валя: А что это такое?
- (4) Валя: Как ты думаешь, какие из этих _____ мне лучше выбрать?
Саша: Я бы выбрала эти.

アンケートの結果、ここではこれまで見てきた果物・野菜の名前、軍関連に属する人を表す名詞において得られた傾向と異なり、ゼロ語尾がかなりの割合で用いられていることが明らかになった。

まず下記の表左上 ов 語尾と書かれた部分、ここでは носки における ов 語尾対ゼロ語尾の比が 80 : 19, その下の лампасы も 61 : 38 と ов 語尾が多く用いられている。「差なし」と書かれた真ん中のグループ、бутсы, манжеты, пьексы, гольфы では ов 語尾, ゼロ語尾の両者が拮抗している。表は右なめ下にいくにつれてゼロ語尾の使用が増していることを表しており, 右下方 пимы では ов 語尾対ゼロ語尾の比が 20 : 76, сандалеты では 19 : 75, чулки では 15 : 83, бахилы においては 13 : 86 とゼロ語尾が8割以上選択されていることが分かる。

先行研究 Горбачевич (1978) における記述 (同 192) との比較において, штиблеты, боты, погоны, кеды, пимы, чулки 等にゼロ語尾が多い点, 今回のアンケート調査からも追認された。эполеты, рейтузы では先行研究において ов 語尾の優勢が記されているが, 今回はゼロ語尾の優勢という結果であった。辞書記述との差をみると, ботфорты, пимы, гольфы において ов 語尾とゼロ語尾の比が逆転してい

ов 語尾	差なし	ゼロ語尾
носки	бутсы	эполеты
(80 : 19)	(48 : 50)	(39 : 60)
лампасы	манжеты	штиблеты
(61 : 38)	(47 : 53)	(36 : 63)
джинсы	пьексы	боты
(59 : 40)	(46 : 47)	(32 : 67)
	гольфы	ботфорты (31 : 63)
	(42 : 56)	погоны (31 : 68)
		шаровары (30 : 69)
		рейтузы (26 : 74)
		кеды (22 : 75)
		мокасины (21 : 78)
		пимы (20 : 76)
		сандалеты (19 : 75)
		краги (17 : 80)
		шорты (15 : 83)
		чулки (15 : 83)
		бахилы (13 : 86)
		латы (10 : 86)

る結果となった。つまり全体として今回の調査からはゼロ語尾選択の傾向が見て取れたといえる。

〈単数主格形の認識（名詞の性に関する認識）と複数生格語尾選択との関連〉

これらの語は通常複数形で用いられるため単数形の認識に欠けており、従って「名詞の性の認識が曖昧となり、語尾のこうしたゆれを生じやすい」ことが予測される（Горбачевич（1978）192）。そこで単数主格形の認識（名詞の性に関する認識）と、複数生格語尾選択との関連について調査した。

（表-1） 単数主格の辞書形が男性名詞形であるもの

辞書 単数 主格	辞書 複数 生格	ов 語尾が多い	差なし	ゼロ語尾が多い	調査 対象者 単数主格
男性名詞	ов	лампасы	гольфы	ботфорты пимы	男性名詞
	ов ゼロ	носки		боты кеды	
	ゼロ			погоны мокасины чулки	

表-1 で扱われる単語は全て単数主格の辞書形が男性名詞形であるものに限る。

上の段より、「辞書における複数生格形に ов 語尾が記載」されている単語で、辞書記述同様に複数生格形に ов 語尾が多く選択されたものに лампасы, ов 語尾形とゼロ語尾形の使用が拮抗しているものに гольфы, ゼロ語尾が多く使用されているものに ботфорты, пимы という結果が明らかになった。

次の段「辞書複数生格形には ов 語尾とゼロ語尾の両方が記載」されている単語で、複数生格形に ов 語尾が多くでたものに носки, 一方単語 боты, кеды ではゼロ語尾が多く選択された。

3 段目, 「辞書複数生格形としてゼロ語尾が記載」されている単語では, погоны, мокасины, чулки のそのすべてでゼロ語尾が多い結果となった。

なお, これら表-1 の単語はその全てにおいて, 調査対象者（インフォーマント）の単数主格形の認識でもその単数主格形を男性名詞としていることが分かっている。¹⁷

（表-2） 単数主格の辞書形が女性名詞形であるもの

辞書 単数 主格	辞書 複数 生格	ов 語尾が多い	差なし	ゼロ語尾が多い	調査 対象者 単数主格
女性名詞	ゼロ ов		бутсы манжеты	эполеты	男性名詞
	ゼロ		пьяксы	штиблеты сандалеты бахилы	
				краги	

表-2 では単数主格の辞書形が女性名詞形であるものを扱っている。「辞書複数生格形にゼロ語尾・ов 語尾の両方が記載」されている単語において, бутсы, манжеты ではゼロ語尾・ов 語尾が実際に拮抗, эполеты においてはゼロ語尾が多く選択されているとの結果がでた。その下「辞書複数生格形にゼロ語尾が記載」されている単語において, 単語 пьяксы ではゼロ語尾・ов 語尾の両者が拮抗, штиблеты, сандалеты, бахилы, краги¹⁸ ではゼロ語尾が多く選択されるという結果が明らかになった。これら表-2 の全ての単語においてインフォーマントがその単数主格形を男性名詞と誤認する傾向が分かっている。¹⁹

ここで興味深いのは, 辞書の単数主格形が男性名詞形であっても女性名詞形であっても, インフォーマントの認識において全ての語が男性名詞と認識されている点である。特に, 表-2 のように辞書における単数主格形が女性名詞, インフォーマントの単数主格形の認識においては男性名詞となるようなケースにおいて, 認識においては男性名詞でありながらそれにもかかわらず複数生格形でゼロ語尾を選択している点に, 「ペアを成すものを表す名詞におけるゼロ語尾の強さ」をみるように思う。表-1 にはこうした面白さはないが, やはり「ペアを成すものを表す名詞におけるゼロ語尾の強さ」の現れたものとなっている。

すなわち「男性名詞を男性名詞と認識していても複数生格形ではゼロ語尾を選択」し, 「本来女性名詞であるものを男性名詞と誤認しているような場合であっても, 複数生格形ではゼロ語尾を選択」する傾向が観察された。このことは「ペアで主に用いられるものを表す名詞複数生格形におけるゼロ語尾の優勢」を示すと同時に, 「ペアで主に用いられるものを表す名詞群における単数主格形の認識（名詞の性に関する認識）が, 複数生格語尾の選択に関して無力である」ことをも暗示していると考えられる。²⁰

5. 結論・展望

本稿は、若年層を対象としたアンケート調査に基づき男性名詞複数生格におけるゆれが依然存在することを確認し、その詳細なゆれの実態を明らかにしたことに加え、更に以下3点の指摘を行うものである。

〈果物・野菜の名前及び軍関連に属する人を表す名詞に関して〉

- (1) OB 語尾の選択率が予想以上に高いこと、また一部の単語に関し「過去において устарелое とされた OB 語尾形」が今回多数派を占めるに到った例があること等から、「OB 語尾からゼロ語尾へのゆれ」のみならず、「ゼロ語尾から OB 語尾」への「ゆりかえし現象」の存在について考慮すべきと考える。²¹

〈軍関連に属する人を表す名詞に関して〉

- (2) 名詞が「集合の意味を有する場合とそれ以外の場合」では語尾の選択に差がでるとしてきた記述に反し、この問題に「寛大」あるいは「無関心」ともとれる回答が多くを占めた結果を踏まえ、更にこの点に関する精密な調査の必要性を訴える。

〈ペアを成す物を表す名詞に関して〉

- (3) 「男性名詞を男性名詞と認識していても複数生格形でゼロ語尾を選択」し、「本来女性名詞であるものを男性名詞と誤認しているような場合であっても、複数生格形ではゼロ語尾を選択」する傾向がみられた。すなわち通常認識されることの極めて少ないこの種の名詞単数主格形は、複数生格語尾の選択に際し影響力を持たないことが推察される。

またペアを成す物を表す名詞におけるゼロ語尾形は、他のグループのそれに比べて、極めて定着している様子が確認されたが、このことは同時に、この種の名詞群におけるゆれがこれ以外の名詞グループにおけるゆれと何らかの点において異質である可能性を示唆すると考えられる。例えば古からの傾向ゼロ語尾形が強く維持され、新語にも波及していった結果と考えること等がそれに当るが、推論に過ぎず言及を控えたい。

総合するに、次のような課題が浮き彫りになった。

〈1〉通時的にみる本課題の意義

歴史的にみて男性名詞複数生格形語尾 OB は、*~ŭ 語幹タイプの名詞変化が*~ō 語幹変化との混用を経

た後、遂には吸収され現在の第一変化に統合されるにあたり、そのかつての痕跡を残した1つの現れとされる。言い換えれば*~ō 語幹に属した多くの男性名詞において、複数生格形は「ゼロ語尾²² から OB 語尾へと変遷」し、そしてその結果今日の規範でもある OB 語尾の定着に到った経緯がある。

本稿で扱ったゆれの問題は、巨視的にみるとこうした歴史的な流れにいわば逆らうものとも言い得る。今回「ゆりかえし」ということばでまとめてきた現象は、通時的にみて本流である「ゼロ語尾から OB 語尾への変遷」という大きな流れに、また共時的にいうところの規範である「OB 語尾主流」の流れに、逆らいかけた小流が飲み込まれていく様子に例えられるようにも思われる。

ただし今回のテーマに該当する名詞には借用語が多い点、古くから残るゼロ語尾と新しく発生したゼロ語尾は区別すべき点など今後の課題は多い。また社会言語学的により広い層の調査が要求されることはいうまでもない。

〈2〉ゆれの意味合い

〈1〉に関連し、本流を「ゼロ語尾から OB 語尾への変遷」とするのであれば、その支流（ゼロ語尾）の存在理由が問われよう。すなわちこのゼロ語尾が言語の体系において如何なる機能（意味合い）をもつのか明らかにする必要がある。先行研究に指摘されている расчлененное 3. と нерасчлененное 3. の問題や、話し言葉に多く観察されるといったスタイル上の問題がこれにあたると考えられるが、前者に関しては今回の調査から積極的に支持できなかった経緯を踏まえ、今後さらに精査していく必要がある。また仮にこうした何らかの機能が発達していない（あるいはその機能が独立しきれていない）のであれば、支流が本流へと再吸収されることはごく自然な成り行きと考えるのが言語の経済性からいって妥当であろう。

加えて、これに関連し、男性名詞複数生格の現れる文法的環境への考慮が今後重要な鍵を握ると思われる。例えば定語的な生格として現れる場合、否定生格、y+生格、数詞+生格のように、環境と語尾の関係を考える必要が指摘されよう。今後の課題としたい。

（なかだ あつこ・筑波大学大学院）

辞典

Аванесов, Р. И. *Орфоэпический словарь русского языка. 8-е издание. стереотипное.* М., 2000.

Ожегов, С. И.; Шведова, Н. Ю. *Толковый словарь русского*

языка. 4-е издание. дополненное. М., 1997.

РАН. *Словарь русского языка в четырех томах. 4-е издание. стереотипное.* М., 1999. (МАС)

引用文献

Горбачевич, К. С. 1978. *Вариантность слова и языковая норма на материале современного русского языка.* Л.: Наука.

Грамматика русского языка. т. 1 1952. М., АН СССР. (АГ⁷ 60)

Граудина, Л. К.; Ишкович, В. А.; Катлинская, Л. П. 1976. *Грамматическая правильность русской речи.* М.: Наука.

Панов, М. В. 1968. *Русский язык и советское общество. Морфология и синтаксис современного русского литературного языка.* М.: Наука. (РЯСО)

Русская грамматика. т. 1 1980. М.: Наука. (АГ⁷ 80)

参考文献

Горбачевич, К. С. 1971. *Изменение норм русского литературного языка.* Л.: Просвещение.

Граудина, Л. К. 1964. „О нулевой форме родительного множественного у существительных мужского рода”, В кн. *Развитие грамматики и лексики современного русского языка.* М.: Наука.

Иванов, В. В. 1983. *Историческая грамматика русского языка.* М.: Просвещение.

Розенталь, Д. Э. 1987. *Практическая стилистика русского языка.* изд. 5-е М.: Высшая школа.

注

¹ 本稿は2001年春にロシア、サンクトペテルブルクにおいて行った調査に主に基づくものである。この現地調査は日露青年交流センター小渕フェローシップの助成を受け実現したものであり、ここに記して深く感謝の意を表したい。また国立サンクトペテルブルク大学文学部 A. Л.・ミレツキー助教授より予備調査及びアンケート作成の段階で大変有益な助言を頂いた。ここに感謝申し上げます次第である。

² РЯСО (69) によれば現在使用されている書き言葉において単数主格と複数生格形が同形を取る語は約200語とある。一方 Граудина, Л. К. 他 (1976) によるリストには328語が挙げられている。このリストは具体的ではあるが комментарий や помой のような硬語幹に限らない例も含んでおり注意が必要である。また例えばこのリストにある単語 лимон とこのリストに挙げられていない単語 грейпфрут に関して今回の調査結果が同様の選択比率を示したこと (後述) などを考え合わせると、ゆれのある語の絶対数というものは誤用との境界の問題を孕み一概には示しがたい。

³ ある民族に属する人を表す名詞、測量の単位については稿を改めてまとめる予定である。

⁴ ただしこのことは書き言葉にその例がないことを意味し

ない。

⁵ また事前に、誤解の生じない範囲で、筆者の目的が「正しいロシア語を調べることにあるのではなく、実際どう話されて (使われて) いるのか調べることにある」と説明を行った。

⁶ インフォーマントの内訳：女性127名、男性17名：年齢17歳から20代前半が9割を占め、残り1割は20代後半。ロシア語を母語とするもの。出身地の別等、更なるプライベートに関しては踏み込めない諸事情があり今回は断念した。今後更なる努力をしたい。またこの場をお借りし、アンケートを快諾して下さった学生の皆様に衷心より感謝申し上げます。

⁷ アンケートではカッコ内のような表現は可能か、可能であるならどちらの単数形の形を選択するか尋ねた。以下、質問例。

бахилы (левый бахил, левая бахила)

ботфорты (левый ботфорт, левая ботфорта)

⁸ Граудина, Л. К. 他 (1976) によるリストにおいて<果物・野菜>という意味カテゴリーに入るものは全部で15単語ある。そのうち артишоки, бергамоты は使用頻度及びそのもの自体への認識が極めて低いと考えられること、помидоры, шампиньоны については予備調査の段階でゆれは考えたいとされたため、またアンケート数をむやみに増やせない事情から割愛した。これに先行研究のリストにない単語 грейпфрут を付け足したものが以下の12単語である。

⁹ 比率は筆者の計算による。

¹⁰ 以下、比率を表す場合も同様。

¹¹ もちろん本調査は対象を学生としており、回答に際し規範意識が若干他の人々よりも働いた可能性は筆者も否定はしない。しかしアンケートを一人一人に依頼し回収した感触では、筆者の依頼意図は正確に理解されていたと信じる。

¹² Граудина, Л. К. 他 (1976) には他に4つの単語 рекруты, саперы, солдаты, янычары があるが янычары はあまりに稀にしか用いられないこと、рекруты, солдаты に関しては予備調査からゆれが期待されづかったため、また саперы はアンケート総数の事情から割愛した。

¹³ партизан の扱いに関しては、単語特有の傾向とみなす以外に説明が付けられなかった。今後の課題としたい。

¹⁴ 参考：下線のあるものについては研究社露和辞典にも同様の記述がある。また АГ⁷ 80 もこれに触れている。

¹⁵ この расч.・нерасч.と語尾選択の関連は、先行研究にはないものの果物・野菜を表す名詞群にも有りうると予測し、試みに対比コンテキストを出題したが有意と見られる結果は得られなかった。今回使用した質問は以下のとおり：

(集合名詞的な扱い) мать: Я купила тебе яблоки. / сын:

Хорошо! Я очень люблю их. И много — ты купила?

(個々を重視したコンテキスト) мать: Какой из этих —

ты хочешь взять? / сын: Этот.

¹⁶ Граудина, Л. К. 他 (1976) によるリストにおいてこの種のカテゴリーに属する語は41語。先行研究における言及

の有無などを考慮し単語を絞り込んだ。

- ¹⁷ 調査対象者による名詞の性に関する判断を、以下比率にして示す（男性名詞：判断できず：女性名詞）：лампасы（125：12：7），гольфы（120：13：11），ботфорты（99：13：32），пимы（88：24：32），боты（103：16：25），кеды（89：16：39），погоны（125：8：11），мокасины（98：14：32）以上表-1の単語。
- ただし表中に下線を引いてある носки, чулки に関しては単数形の認識にゆれのある可能性が極めて低いと判断されたため今回質問は行わなかった。この点に関しては更に今後補足していきたい。
- ¹⁸ 単語 краги に関しては名詞の意味性質上 левый, левая として質問するに適さなかったため調査対象外とした。
- ¹⁹ 調査対象者による名詞の性に関する判断を、以下比率にして示す（男性名詞：判断できず：女性名詞）：бутсы（88：13：43），манжеты（96：19：29），пексы（96：31：17），эполеты（102：30：12），штиблеты（114：

13：17），сандалеты（98：15：31），бахилы（79：21：44）以上表-2の単語についてのインフォーマントの認識。

- ²⁰ 参考：一部調査を行った pluralia tantum の名詞について

辞書単数主格	辞書複数生格	ов 語尾が多め	ゼロ語尾が多い
なし	ов	джинсы	шорты
なし	ゼロ		шаровары рейтузы латы

pluralia tantum の名詞でも、джинсы を除く全てでゼロ語尾が多く選択されている結果となり、ここでもゼロ語尾が優勢である様子が確認された。

- ²¹ 関連して、単語の使用頻度・認知の度合いがゆれに影響を及ぼすことが容易に予測されるが、アンケートを実施した際、別項を立てて行った調査からは特にこの点に関し結論を引き出すには到らなかった。更にこの観点から問題にアプローチを続ける必要がある。
- ²² 弱化母音 -ь の消失後を共に示す。

Atsuko NAKADA

A study on the usage of masculine genitive plural case endings

The genitive plural ending for the majority of masculine nouns is -ов, but it is known that certain masculine nouns also take the zero ending (e.g. граммов/грамм).

This paper reports on the current tendency of fluctuation between the -ов ending and the zero ending for words in the following semantic categories: fruit and vegetables, members of human groups (military units), and objects occurring mostly in pairs. This report is based on the results of a survey carried out in 2001 on the linguistic awareness of 144 college students of philology in St. Petersburg. This survey showed that both -ов/zero can be chosen, but the tendencies for their selection vary according to word groups, as follows:

<fruit and vegetables>; <military units>

Previous studies indicate that the zero ending is used fairly consistently. However, the results of this study indicate that there may be a retrieval phenomenon of -ов ending preference (instead of the newer zero ending), because the data obtained from the questionnaire showed a percentage of -ов selection that was higher than that predicted, and this tendency was observed even for words whose -ов forms have been considered archaic in former studies.

With respect to military units, Ožegov and Švedova (eds.) say in their dictionary that when a word is used with collective meaning, the zero ending is preferred, and when it is not used with collective meaning, -ов is preferred. The responses to our questionnaire, however, did not confirm this description.

<objects occurring mostly in pairs>

The zero ending is chosen with greater frequency in this group only. Additional survey results for this group make it clear that the cognition of the nominative singular form (masculine or feminine nouns) has nothing to do with the choice of genitive plural endings.